



「子育て支援コラム」

平成28年度第3回テーマ
～こころの絆創膏～

今回は、学校の中でスクールカウンセラーと同じように、子どもたちのこころと身体の成長を見守る仕事をしている養護の先生にお聞きしたお話をご紹介します。

養護教諭の先生によると、低学年の子どもほど、いつもと環境が変わると体調に影響が出る子どもが多いそうです。

たとえば、同じクラスの子どもの1日に何人も保健室に来るので、どうしたのかしらとクラスの様子を見にいくと、担任の先生が出張中で、他の先生が代わりに授業をしていたということがあったそうです。

一方で、環境の変化による子どもの変化は、はっきりとした病気としては表れないこともあるようです。

ある時、熱もなく、特に異常も見られないのに、ちょこちょこ保健室に顔を出す子どもがいました。気になって、担任の先生にお話を伺うと、その子はお母さんが出産のため、おばあちゃんとお留守番をしていることが分かりました。

「気持ちが悪いんです」と言われ、検温しても平熱。「この指、怪我した」と見せてくれる指に大きな異常は見られない。そんな時には、保健室で5分ほど寝かせてあげたり、絆創膏を貼ってあげたりすると、また元気を取り戻すそうです。

皆さんにも思いあたることはありませんか？子ども、特に表現力の未発達な低学年の子どもは、気持ちの状態を言葉で適切に表現できません。その代わりに、身体の変化として周りに自分の状況を訴えることが多いのです。

いつもと違うことが起きたとき、その子に必要なのは、「安心感」というこころの絆創膏ではないでしょうか。

(早川和子 はやかわ かずこ
臨床心理士、墨田区スクール
カウンセラー)

